夏に挑む Zoom Up Tome 2019 Special

全国高校総合体育大会 陸上棒高跳び

小泉宗士（佐沼高2年）

中学全国６位の実績を持つ小泉だが、高校では思ったように記録が伸びず、苦悩の日々が続いた。助走の歩数を変えたり、堅さが違うポールを試したりと試行錯誤を繰り返す。努力を続け、県大会で優勝するが、自己ベストの４㍍50を更新できなかった。

全国大会直前、コーチの助言を受け、最も筋量が必要になるポールを選択。「自分に扱えるか不安だった」と振り返るが、直前練習で今までにはない良い感覚をつかむ。自己最高の４㍍70を記録するが予選敗退。「あの感覚があれば４㍍80はいけたはず」と唇をかむ。次の舞台である国体へ、助走が始まっている。

全国高校総合体育大会 カヌー競技カヤックペア

堀内希渚（登米高2年）
加藤有佳（登米高2年）

写真左から、加藤、堀内

高校入学後、カヌーを始め、今年４月の部内タイムトライアルを経てペアを組んだ２人。スタートダッシュは堀内、後半の追い上げは加藤が得意。「全力を出し切ろう」と挑んだ県総体。「集中していて、周りが見えていなかった。まさか１位になるなんて」と驚く。真逆のレーススタイルが相乗効果を生んだ。

初のインターハイ、いいスタートを切ったがレース中盤に気付くと転覆。予選敗退で幕を閉じた。工藤大将（ひろまさ）監督は「２人とも前向きに取り組み、吸収していくタイプ。まだまだ伸びしろがある」と話す。２人は「またペアを組んだ時、成長した自分でいたい」と前を向いた。

全国中学校柔道大会 男子個人90キロ超級

刈谷大芽（佐沼中3年）

中学１年から柔道を始めた刈谷。ひたむきな姿勢で、努力を惜しまず練習に取り組んできた。階級を上げて臨んだ県総体。昨年の覇者に勝利し、自身初となる優勝をつかみとった。「どこまで自分の力が通用するのか試したい」と挑んだ全中。技を掛け逃げする選手にもひるまず１回戦を突破したが、「油断があった」と話す２回戦で相手に抑え込まれ惜敗。柔道を始め、２年余りで全国の舞台に立った刈谷。「今があるのは、支えてくれるみんなのおかげ」と感謝の気持ちを忘れない。「高校ではインターハイに出場し、ベスト４を目指す」。新芽は大きな開花を遂げ、新たなステージに闘志を燃やす。

全国小学生陸上大会 コンバインドA（80メートルハードル・走り高跳び）

千葉遼（東郷小6年）

「市の大会で入賞したい」と控えめに目標を立てた少年が、全国の舞台で躍動した。

学校では１、２位を争う運動神経の持ち主だが、コンバインドAの種目である80㍍ハードルと走り高跳びは６年生になるまで未経験。担任の先生に提案されたときは、自分にできるか半信半疑だった。しかし、市大会が終わってみれば２位に大差をつけて優勝。これが千葉にとって大きな自信になる。「全国大会は緊張したけど、今まで教わったことを思い出して集中した」と、走り高跳びでは練習で一度も飛べなかった１㍍25を成功。舞台は中学へ。さらなる活躍に胸が膨らむ。

第35回 わんぱく相撲全国大会

佐々木開地（南方小6年）

２年ぶり２回目の出場となったわんぱく相撲全国大会。昨年は地区大会で敗退し、悔しさをばねに稽古や自主トレに打ち込んだ。「納得できる相撲を取る」と、地区大会の予選リーグを全勝で突破し、決勝トーナメントへ。準決勝の相手は昨年のわんぱく相撲県代表。「全国を決める大事な試合」と気合いを入れた佐々木は、自分の相撲を取り切り、下手投げで勝利をつかんだ。安心と喜びで涙があふれた。勢いに乗り、続く決勝も勝利した。

全国大会は、引き落としで１回戦敗退。「負けたのは悔しいけど、稽古をもっと頑張って、残りの大会で１位を取りたい」。持ち前の明るさで優勝への道を切り開く。

全国中学校 相撲選手権大会

阿部凌成（米山中2年）

「小学生の頃から負け続けている相手に勝ち、全中に出場したい」。階級や学年関係なく、選手総当たりでぶつかり合う県総体で、阿部はライバルとの一番に勝利し、総合個人戦で３位入賞。全国への切符をつかんだ。全中では、自分よりも体の大きな選手が並ぶ。阿南一中（徳島県）戦は、土俵際に押し込まれるが、相手の力を利用して体をひねり、引き落としで勝利。しかし、他の試合では自分の相撲を取らせてもらえず、決勝には進めなかった。「まだ自分は全力を出しきれていない」。敗戦を知り、地道な努力で強さを学ぶ阿部の顔に曇りはない。全中出場を通過点に、来年はさらなる飛躍を誓う。

全国小学生陸上大会 女子100メートル

石川愛怜（新田小6年）

「悔しい思いをリベンジしたかった」と振り返る石川。昨年、優勝候補として臨んだ市大会で、まさかの転倒。悔しさをばねに、栗原市のスポーツ少年団で土日を返上して練習に明け暮れた。

満を持して臨んだ市大会で優勝し、見事リベンジを果たした。初の県大会で緊張する石川に「自信を持って走っておいで」と両親の言葉が背中を押し、自己ベストで優勝。全国大会では直前に股関節を痛めてしまい、結果は振るわなかったが「高いレベルの人たちと一緒に走れて、いい経験になった。今度は全中を目指して努力を続けていきたい」と、新たな舞台での飛躍を誓った。

全国小学生陸上大会 コンバインドA（80メートルハードル・走り高跳び）

伊藤藍織（南方小6年）

全国大会の会場となった横浜国際総合競技場は、兄が中学の陸上大会で立った、伊藤にとってあこがれの舞台。当時、家族と応援に駆け付けたときは、競技場の大きさと観客の多さに衝撃を受けた。

夢の舞台まであと一歩に迫った宮城県最終選考会。「お母さんと一緒にうまい選手の動画を見て、勉強したことを思い出した」と走り高跳びで自己ベストを記録し優勝。全国大会では、緊張もあり思ったような結果は残せなかったが「お兄ちゃんと同じ舞台に立ててうれしかった」と夢を叶えた伊藤は、晴れやかな笑顔で大会を振り返った。